タイム・スクリーン

有森信二

僕の名前は、Ｙという。
実にありふれた名前であるから名乗るほどのことはないが、他の人物や、他のものと区別する必要はあろうと思われるので、プログラムで使用している頭文字だけでも紹介しておこう。
ところで、なぜＹと呼ぶのかというと、吉田だとか、山下だとか、ＹＡＮだとかに特定する必要がないという理由から、とりあえずＹという記号を使うというに過ぎない。
ついでに、プログラムでは、僕が勤める事務機販売会社の支店の名称がＦ、中古のジープがＴ、五年三月住んでいる一ＫのアパートがＨとなっている。しかし、Ｆも、Ｔも、Ｈも、特にプログラム名にこだわる必要などないので、できるだけ通常の固有名詞で呼ぶことにする。

戸外は、だんだん秋の気配に満ちてきた。
街路樹の欅並木の葉が、真上からの陽射しに葉脈を染め、残り日を惜しむかのごとくにしなをつくり始めた。特に厳しい暑さだったこの夏の、こってりした空気の層も、こころもち薄くなってきた。そのせいか、アパートのすぐ裏手で一月ぐらい前に着工された架橋工事の音が、日に日に鋭さを増してきた。
窓の外をぼんやり眺めて過ごす日が、これで七日になる。昼過ぎに目覚め、それからゆっくりとドアに宙吊りになっている新聞を広げ、ひととおり目を通す。これはなにも自分の興味を満たすものではないが、二十年来の日課になっているので、殆どの場合、字面だけを追い、後ろの机の下に積み重ねておく。それが済むと、コンビニエンスストアの袋からカップ麺を取り出し、湯を注ぐ。

支店には、長期休暇を電話で願い出た。
電話口の支店長は、これから年末を控え、一番忙しいときじゃないか、と怒気を露に詰り始めたが、僕が軽い吐血をしたというと、ことばに詰まってしまった。その隙に電話を切った。
入社以来五年半、殆ど休日返上で働いてきた。
支店長も、この時期に、忠実な部下であった僕が長期休暇をとるなどとは予想もしないことであったらしく、その狼狽ぶりはおかしさを通り越し、気の毒なほどだった。
しかし、僕は、三か月あるいは四か月、もしかすると半年も一年

も出社しない覚悟だった。
もう一息で完成しそうなプログラム、「タイム・スクリーン」の仕上げのため、僕には、三か月あるいは半年なりの時間がどうしても必要なのだ。
僕はこれまで、プログラミング専門の学校に通ったこともないし、手ほどきさえ受けていない。唯一知り得た知識といえば、今の事務機販売会社に入ってから、事業所や研究室に機器を納品する際、仕様書やカタログや説明書を丹念に読むことで、コンピュータの仕組みを初歩的に知り得たに過ぎない。
しかし、僕は殆ど直感的に、そのＹＥＳあるいはＮＯという単純な指示を与え、それを突き詰めていくとき、この時間というものを視覚化し、前後左右に、縦横無尽に、それを操れるのではないか、という確信をもつに至った。
つまり、簡単にいえば、ビデオテープを操作することにより、時間、空間を思いのままに映し出すことができる、ということを思い起こしてもらえばいい。
タイム・スクリーンが完成すれば、ムー大陸が海中に没する瞬間や、恐竜類が絶滅するときの様子、ワーテルローの戦いに破れ、落ちていくナポレオンの表情（特に、顔の皺のアップの様子など）まで、リアルにスクリーンに再現することができる筈だ。
いや、僕が本当に目論んでいるのはそれだけではない。わが惑星系が、巨星となった太陽に呑まれてしまう様や、太陽が超新星となって爆発する瞬間、いやいや、宇宙誕生のビッグバンの瞬間でさえ、スクリーンに映し出そうとするのだ。
ＹＥＳとＮＯの組み合わせ。この単純極まる指示を積み上げることによって、無限の命題を、望みのままに処理することができる。
例えば、「富士山は穂高より高い」〈ＹＥＳ〉であり、「富士山はマッキンレーより高い」〈ＮＯ〉である。
この延長線上に、タイム・スクリーンはある。
常識と常識との組み合わせから成るプログラムに、ナポレオンのＩＤや、徳川家康のＩＤを忠実に入力することにより、ナポレオンも、徳川家康も、時間のなかに立ち上がり、姿を現す。
考え方は、シンプルこの上もない。
僕が、過ぎっていった彼らのＩＤというものに着目したのは、支店の二軒隣にある、それこそ客の入っているところなど見たことがない古本屋に、コピーの新機種の納入にいったからである。
僕は、亭主が指に唾をつけ札束を数えている間に、目の高さにある薄い黄ばんだ本を棚から抜いた。黄ばんだ本の表紙をめくってみると、前文などはなく、いきなり二十桁のアルファベットと数字からなる記号と物の名や人名だけが書かれ、公式や簡単な注釈だけが

並んでいた。
薄気味の悪い本だと、棚に戻そうとしているのを札束の隙間から目ざとく見つけた亭主が、ニヤリと笑った。
「そいつは、精神病院で死んだUという物理学者の卵のガリ版刷りでな、こいつを学会に発表したところ、世界中の笑いものになったという。気に入ったらもっていきな」
元の位置に戻したばかりの本を、僕はなぜかもう一度取り出し、亭主の疑い深そうな目が粘りついてくるのを意識しながら店を出たのだった。
もっとも、この本は、一年近く僕の部屋のソファーの上で眠っており、僕自身その存在さえ忘れかけていたのだったが、ひどく酔った晩、壁に張り付いた蜘蛛を追い払おうと、手近にあった本で打ったのだが、酔ったはずみで手元が狂い、勢いよく投げ出してしまったため、本の中身が壁に飛び散り、バラバラになってしまった。
裂けたページやインクの染みたページなどもあり、丸めて屑籠に入れようとしたが、「ムー大陸のＩＤを読み出す方法」という一行に目が止まり、眺めているうちに、これは、「過ぎ去った未来、いつでも出会える過去への誘い」とでも銘打つべき内容の本であることがわかった。
全体で百ページにも満たない、それもところどころページが欠落しており、素人向きの内容ではないから、いくつもの公式の並んだ部分の、それこそ一パーセントでさえ理解できないのではないかと思われたが、公式に導かれ例示されている物の名や人名には、多少馴染みがあった。
さらに、太字で記された「ここに至っては、創造主のＩＤさえ導き出すことも可能であるが、これを実現ならしめたとき、大いなる罪に値するに相違ないことを、一科学者として認知せざるを得ない。一九八×年、Ｕ」というくだりもある。
つけ加えるならば、Ｕが出入りした、我が国でも有数の大学といわれる数校の大学教授に見せたところ、一様に返ってきたことばは、「くだらんね。古いゲームのソフトかい。付き合ってられないよ」というものばかりだった。

たてつけのよくない網戸を開いて、昨夜から干したままの下着を取り込む。下着といっても、持っているのは数枚きりでしかない。
この街に住んで、五年と三月になる。最初の三月は会社の独身寮に入っていたが、共同生活だと、どうしてもプライベートな時間が削られてしまうので、支店から車で三十分のアパートに、すぐに引っ越した。
六畳と台所だけの、このアパートの五階に移ってきたとき、荷物

といえば布団袋と本箱だけで、建て付けの悪い窓から台所へと乾いた秋風が吹き抜けていく度に、僕は清涼飲料を一気に飲み乾した、とでもいうべき快哉を覚えたものだった。

やっと僕は一人になれた。予定したとおりの一人きりの生活を、とうとう手に入れた。

そのとき三十七歳の僕は、半年前に某官庁の課長補佐の職を辞し、妻と二人の娘たちとの間で離婚が成立したばかりだった。

僕は、幾多の地方自治体を指揮する中央官庁の直接責任者として、同輩たちの先頭をきって走っていた。誰もから、エリートと目される集団の先頭をきって。

そう、あの日まで。いや、あの時間まで、といった方が適切かも知れない。

僕は、同期の誰よりも頭が切れると思っていたし、群がってくる部下や管下の自治体の代表も、僕を避けては道路一本つくれないのだった。

僕はその日、僕の地元で行われた県の植樹祭に出席していた。出席者は、知事を始め地元選出代議士、地元経済界の主だったためんめん、といったところだった。

僕は先頭の代議士に続き、あらかじめその場所に適するよう十分吟味されたであろう梅の苗のもとに、リボンのゆわえられた真新しいスコップを抱え、近付いたのだった。

僕は、盛り土の一掬いを苗にかけ、二掬い目に移ろうとして、何気なく傍で苗木を支えている男の顔を見た。そして、男の首にかけられた赤いタオルを見た。

その瞬間、足元に電気が走った。いや、頭の血が一挙に流れ下り、僕と会場全体の間に、なんともいえない奇妙な隙間ができた。

僕は、しばらく忘我の態（傍目には、相変わらず傲岸ともみえる立ち居で、スコップをふるっていたに違いない）で、いまにも崩れ落ちてしまうのではないかと思える自分を、かろうじて支えていた。

口がひりついて、唾を飲み込もうとするのだが、肝腎の唾が湧いてこない。あわてて目をしばたたいた。目を何度、その男から逸らそうとしたことか。

僕（Ｙ）が、ぼく（Ｙではない）自身を間近に見下ろしているのだった。スコップをふるっている僕が、手でスコップの跡をならし、枝の向きをしきりに気にしているぼくの、皺の刻まれた横顔を一メートル弱の距離で見詰めている。

この日のために、ぼく（Ｙではない）は、丹精を込め育ててきた見本林の紅梅を、半日がかりで掘り上げ、若い部下と一緒に現場に

運んだのだった。
ぼくは、あと半年で定年を迎えようとしている大学の林業手で、教官や学生たちの研究や授業のアシスタントを務めて四十年、くる日もくる日も見本林の一本一本の木肌に触れてきた。
そんなぼくに、ふって湧いたとしかいいようのない話がきた。県政施行百三十周年記念式典に、県の木である梅を植樹するという。人選がどこでどうなされたのか知らないが、数ある造園業者にではなく、見本林二十ヘクタールを預かって四十年というぼくに、紅白梅十二本を厳重に選定し、準備するようにと、学長直々の命が下った。
植樹祭当日の次第など殆ど教えられないまま、樹種の選定に当たり、一か月近くかけて十二本を選び、念入りに手入れを施し、掘り起こし作業に半日を要して、運び込んだ。
式典の進行を見ながらぼくは、会場の控えのテントの中で普段の作業着のまま待機していたのだったが、植樹の直前に、突然梅の枝を支えるよう命じられ、主催者側の県のカラーである赤いタオルを首にかけ歩み出た。
もちろん、報道各社のカメラのレンズは鍬をふるう代議士や、県知事や、中央官庁の役人の顔をアップで映すのであるから、ぼくの指一本表に出ることはない。
ぼくは上手の方の苗の枝を支えながら、鍬をふるう、まだ四十前と思われる傲岸そうな男の表情をそれとなく窺った。
その瞬間、立ちくらみに似た悪心に襲われ、あわてて目を落とし、枝につかまった。いや、つかまる思いでやっと中腰の自分を支えた。
なにがこうさせるのか、わからなかった。緊張のあまり、持病の高血圧が出たのかと思った。疲れたり、風邪をこじらせたりすると、よく出る症状であった。
しかし、なにかが違った。
自分が自分を操れない領域に踏み込んだのだ、という思いがあった。今、最も晴れがましい舞台に立っている筈であるのに、自分がひどく頼りない。
冷たくぬめりのある脂汗が、脇の下からどっと吹き上がってきた。
僕（Y）は、幼いとき、夢でこの光景を何度かみたことがある。
脈絡もない夢の最後に、植樹祭の場面がよく出てきた。なんの変哲もない夢であるが、起きたとき、決まって寝汗にまみれていた。
多分、八、九歳の頃、九度の熱で寝込んでいたときにみた夢だろう。僕は、小学校を終える頃まで、決まって季節の変わり目毎に高熱を出し、激しく咳込み、痙攣を起こした。
目覚めた後、肩口が抜け落ち、平衡感覚を失ったのではないかと

いう悪寒とだるさがあった。
夢は、いつも、色とりどりの家々の立ち並ぶ街並みで始まった。
Ｓと呼ばれる僕は自由に空を飛んでおり、あたりには、軽やかなメロディが流れ、街を渡る風は花の匂いに満ちていた。父も母も、兄妹も、数えきれないほど多くの友達もいて、僕のいく先々で歓声があがった。
僕の順番がきた。
僕は、Ｓという名前を捨て、一人荒野に出るのだ。
見わたすかぎり砂だけがうねり続く中を、幾日も、幾日も歩かねばならない。灼熱の太陽の下、光を遮るものもなく、口にする水の一滴もない中を一人歩く。
歩かねばならない。
そうすることは、必要なことだと十分知っており、父や母や兄妹たちから、きちんと努めを果たしてくるよう励まされ、素直で気だての良いＳのことだ、きっと大丈夫だから、と笑顔で送り出されたのだった。
街を離れ、十日十晩というもの、飲まず食わずで荒野を歩き、目印の一本の植物が準備された場所にまでたどりつかねばならない。
植物の傍には、長い髭を生やした仙人みたいな老人がいて、植物を植えるためのスコップを用意して待っている。
昼間の熱と、夜間の凍えるほどの寒さの中、息絶え絶えの態で老人の前にたどりつくと、教えられるとおりに、残された全ての力を振り絞り、植物を穴に落とし込ませ、老人が差し出す白い液体を受け取り、植物の根本に微かな潤いを与えてやる。
夢は、いつのときも、ほぼこんなストーリーで進み、最後の植樹の場面で終わった。

この夢を、最近またよくみるのである。
明け方近くのまどろみの中、夢は現れ、消えるのだったが、離婚前半年ほどというもの、週に一度のペースになった。
夢にうなされている自分の声に驚いて目覚めると、決まって強く勃起したペニスを、手で慰めねばならなかった。妻とは事実上の別居状態にあり、性生活が全くなくなったためかと、ぼんやりした頭の中でそんなことを反芻しながら、迫ってくる出勤時間に間に合わせるため、簡単にことを済ませた。
それが、三日に一度の頻度になった。明け方に夢はやってくるとはいえ、睡眠時間がそがれることに違いはなかった。
実際の植樹祭に臨んだ朝も、夢をみた。自分の植える梅の苗を支える男の輪郭までが、夢の中に現れた。しかし、梅の枝を支える初老の男の顔はのっぺらぼうだった。のっぺらぼうというより、男の

体全体が透けていた。
なんともいいがたい胸苦しさがあった。
疲れていた。

傍目には、僕は知事や代議士たちとともに、梅の根本に形ばかりの土をやり、男の差し出す水桶から一杯の水を掬い、根本にかけると、拍手の中を来賓用のテントにゆっくりと戻ったのだった。
その後、引き続いて催された祝賀会の乾杯の音頭で、ビールを一口飲んだ。

ぼく（Ｙではない）は、主賓たちが去った後、改めて苗の一本一本に土を与え、根にたっぷりと水を含ませ、植樹の仕上げをした。
丹念に選んだ苗が、新しい土にきちんと馴染めるかどうか、木々の声を聞き、木々の表情を眺めながら、四十年の経験から得た知識と技術を用い、最後の確認をした。全て良好だった。
だから、テントの中で進められている祝賀会のことには関心がなかったし、進行の具合にもうわの空だった。
ただ、自分が支えた苗を植える男の顔を上目づかいに見たときに襲われた、あの激しい立ちくらみのことを思っていた。突然、空気がからっぽになったみたいだった酩酊感。あやうく蹲り、崩れ落ちてしまいそうなところを、なんとか寸前に逃れることができたのだったが。
首の付け根をさすり、腕を大きく回してみた。
異常はなかった。数十分前のあの不快感はなんだったのだろう、と思えるほどだった。
この役目を終えれば、すぐそこに定年が待っている。見本林の燃え上がる紅葉に包まれながら施肥をし、冬支度を済ませ、梅が咲き、椿に目白が戯れ、桜の花芽がはち切れそうに膨らむ頃、四十年以上を暮らした見本林を去ることになる。
農業高校を出て、大学の教室に臨時職員として使ってもらううち、ぼくが受け持つ樹木の色合いの良さ、育ちの良さが認められ、見本林の担当として本雇いになった。
正確にいえば、四十一年と三月を見本林一筋に過ごしてきた。始めは考えてもいなかった技術専門職員という下級管理職相当の地位も与えられ、恵まれた勤務生活だった。
もちろん、我が子より若い学生たちに植林や伐採の手ほどきをし、卒業した彼らに、今度は部下として仕えるという大学ならではの仕組みに、全くとまどいがなかったとはいえないのであるが、意地を張るほどのことでもなかった。
ぼくは、十二本の紅白梅が新しい土の気を吸い始めたのを長年の

勘で確認すると、二人の部下に命じて水桶やスコップなどの道具を軽トラックに積み込み、会場を出た。

気が付いたとき、僕（Ｙ）は官用車の座席にいた。運転手は、発車していいものかと何度か尋ねたらしかった。いいんだ、といった自分のことばで我に返った。

運転手のスケジュールでは、一時間以上早い出発の筈だ。

後部座席の窓を開けると、テントの方では来賓の挨拶が続いているらしく、風に乗って男のダミ声が流れてきた。声のトーンからして、大臣を務めたことのある代議士のそれに違いない。

どうやってテントを出、車まで歩いてきたのだったか覚えていない。乾杯のビールを一口飲んだ。記憶はそこで途絶える。

セレモニーが続いているところをみると、失態という失態はやらかしていないらしい。

運転手が怪訝そうな顔で車を発進させたので、局長からの呼び戻しの連絡があってな、と背中にいった。いった後で、運転手に理由を告げることなど、これまでの自分にはなかったことだ、と思った。

ビールを一口飲んだとき、確か、梅の苗を支えていた男の顔が頭の隅を過ぎったのだった。男が、男の汗の臭いが、間近に迫ってきた。

男の顔に見覚えがあった。確かに、どこかで出会ったことがある。どころか、それは自分そのものではないか。そう考えるうちに、頭の中が支離滅裂になってきた。

後部座席に蹲り考えていたのは、そのことばかりだった。

どうして、あの初老の男が自分だというのか。年齢も、身分も、明らかに違うのに。

しかし、あれは自分だということがわかる。世の中には、瓜二つの人間がどこかに必ずいるという。が、あの男の場合は似ても似つかない。でも、男は僕自身であるのだ。それは、直感としかいいようのないものであり、いわば、同じＤＮＡを持つ者同士の波動とでもいうべきか。

わかるのだ。ただ、わかる。

つい一時間前までは、こういう出会いがあろうとは考えもしなかった。自分が、自分自身を見下ろし、苗を植えることになろうとは毫も思わなかった。

あの男は自分自身であるのに、人格は別だ。

無数にある僕自身の種のうちの二つが、あらかじめ決められた順番に従い、ともに地上に降りるというシナリオのままに実行した。

「頑張れよ」

「どこかで会ったときは、思い出してくれ」

「自分自身だもの、思い出すも出さないもないだろう」
「敵同士にだけはならないようにしよう」
「そう祈るよ」
「グッド・ラックだな」
「すぐに、また戻ってくるんだからな」
「ああ、すぐにね」
そんな会話をした筈だ。僕とぼくは、ＩＤを確認する手続きにも一緒に出向き、手を握り合った。
勿論、それは明け方にみるくだんの夢の中での話だが。
「ホテルの方へ直行してよろしいでしょうか」
かなり走ったのだろう、やや疲れ加減の運転手の声に、あいまいに頷いた。しかし、そのまま戻る気分にはなれそうもなかったので、いつも泊まるホテルの赤いレンガ壁が見え始める前の信号で、車を止めさせた。
「ありがとう。ちょっと用事を思い出した」
運転手には先にホテルに戻るように指示し、車を降りた。
街中にも、秋風が舞い始めていた。秋風に吹き乱される前髪のかたちに気をとられながら、喫茶店に入った。とびきり苦い味のコーヒーをすすりたかった。
僕は、男の首にかけられた赤いタオルに刻まれたアルファベットと数字からなる二十桁の記号をはっきり覚えていた。

軽トラックの助手席に座り、ぼく（Ｙではない）は判然としない気持にとらわれていた。
県政百三十周年記念の植樹を、無事に終えることができたのだから、教授からも、学長からも、ねぎらいの声がかかることだろう。
「見本林で育ててきた梅の並木が、記念館の前にできるのかと思うと、ゾクゾクしますね。やっぱりこれは、先輩の精進の賜ですね」
部下たちは交互にいった。声にも表情にも、大きな仕事をなし遂げたという晴れがましさがある。
「ぼくだけの力じゃない。みんなの力の合作だ。日頃の地道な仕事に、ちゃんと日が当たったということだろう。本当に御苦労さん」
同じことばを二度、三度繰り返した。
首筋に滲んでくる汗をタオルで拭いながら、あの才気走った役人の顔を思い出す。
あの顔には見覚えがある。特に、左斜めから鼻筋にかけての鋭角的な線は、二十数年前の自分の顔そのものである。出勤前、髭を剃るときいつも見た気難しさと、ちょっと冷たさを感じさせる線だ。
それにしても、どうしてぼく自身が同じ場所で出くわしたというのだろう。技術職員の自分と、いかにも抜け目のない怜悧な目をし

た若手のエリート官僚と。
「いつもの店でいいですよね」
部下の一人が、打ち上げの話を向けてきたので、いいよ、と返した。

一杯のコーヒーでやや落ち着いた。
引け時前ということもあり、店にはまばらな客しかいない。バックには、カーペンターズが流れている。軽快なテンポの中に、少しだけけだるさを滲ませたメロディには共感するのだが、曲名が思い出せない。
僕は二杯目を注文して、煙草に火を点けた。
ふと、二人の娘のことを思った。妻と娘が出ていって、一年近くになる。
上の子は小学校の四年になる筈だ。下の子も、来年は入学する。
妻は実家の援助で役所の近くにマンションを購入し、女性としては最も早く課長補佐職に就いた。同じ省に勤務するとはいえ、フロアが違うのでめったに顔を会わせることはないが、彼女の猛烈な仕事ぶりはよく噂に聞こえてくる。
互いの勤務時間のずれが原因だったとはいえ、本当に妻が家を出ていくとは思わなかった。勿論、僕が課の大学の後輩に当たる松井祐子と関係したことにも原因がある。しかし、祐子との関係は、十二時を過ぎても帰ってこない妻との生活が、五年も続いたことにも起因している。
直感の鋭い妻は、三度目の頃には、祐子の名前までずばりといい当てた。僕をまとう匂いでわかるのだといった。
「いいわよ、お好きなように。勿論、今みたいなすれ違いの生活には、無理があるわ。でも、離婚は駄目。お互いのためによくないから。子供たちだって、巻き添えになってしまうわ」
たまの日曜日、妻は台所に立ち、あまり得意ではない食事の支度をした。メニューは、冷凍の品を多用する簡単なものだった。
「せいぜいあの子を可愛がってあげることね。あなたと出会った頃、わたしにしてくれたと同じに」
妻が初めての女性だった僕は、女というものは、どこまでも居丈高でわがままな存在なのかと思っていた。

祐子は違った。
僕の気持の襞々を、一つ一つ丹念にほぐしてくれる寛容さがあった。僕は、祐子の好みである音楽が好きだった。とりわけ、バラード系の曲になると飽かずに、繰り返し聴いた。カーペンターズや、リチャード・クレイダーマンは、客たちのざわめきの中でも、地下

鉄のコンコースででも聞き分けることができたし、次のフレーズのメロディが自然に湧いて出た。
食べ物の好みも一緒だった。山菜や魚介類のうまい店を、よく食べ歩いた。アルコールも、ワインで乾杯し、日本酒を中心に地方の銘柄を楽しむという飲み方だった。
食事の後は、祐子のアパートに寄った。通りから三つ目の角を入っただけであるのに、閑静な佇まいになっていて、八階にある部屋からは正面に霞ヶ関ビルを仰ぐことができた。
「通勤には便利だな」
「たまたま、空いていたの。学生時代からだから、もうすぐ十年になるわ。ちょっと古びているけれど、すっかり馴染んじゃって」
僕が先にシャワーを使っていると、遅れて祐子が入ってくる。祐子の肌は、最初、北国の女はこんなに色が白くてか細いのかと驚いたのだったが、何度目にしてもその思いは変わらなかった。
「十年後輩なんだ、君は」
僕は、祐子の背中に手をまわし、強く引き寄せる。唇を求めると、いやいやをする恰好で首を振る。しかし、唇の中はやわらかに湿っていて、舌先が僕の舌にからめとられると、目を閉じながら肌を合わせてくる。
「奥様も十年先輩ですわ」
目を閉じたまま、祐子がいう。僕も、妻も、祐子も同じ大学の、同じ学部卒だ。
「彼女しか知らなかった」
祐子とは、いつも同じ会話で始まった。
「彼女は、もう僕など必要としない。年々女性を脱ぎ捨て、というのは僕から見た場合に過ぎないだろうけど、なにごとにも貪欲になってきた」
「奥様は、私の目から見ても、とてもチャーミングで有能な方ですわ」
そうかも知れない、と僕も思う。
妻は、二人の子持ちとは思えない若さを保っているし、子供を持ったことで、仕事面においても、コミュニケーションの場においても、より懐の深い対応をする術を身に付けた、と僕は見る。
「彼女から必要とされないから、君を求めているんじゃないよ。最初、君を見たときから、特別な思いがあった。きっと、以前、どこかで出会ったという」
「私もです」
「僕にとって、君は本当に驚きなんだ。新しい発見だといえば胡散臭いかもしれないけど、とても穏やかで、はるかに遠くて、胸に溢れるほどの懐かしいものを感じる」

「私、決して奥様と事を荒立てるなんて、いい出しませんわ。こうやって、肌を温め合うことだけでいいんです」
祐子は、鼻筋から顎にかけての鮮やかな線をやわらかに反らせ、微笑を浮かべ、目を閉じたままゆっくりと昇っていった。

しかし、僕の腕の中にある筈だった祐子は、僕に相談することもなく、結婚のため突然退職した。相手は、妻の部下だった。
二人の結婚式に招待された僕と妻は、隣り合った席にいながらことばを交わすこともなかった。特に、妻が新郎の上司としてスピーチをするとき、僕は殊更音をたててフォークを使った。
一年後、祐子は男の子を産んだ。一年後だということに、僕は複雑な胸を撫でた。
妻が出ていったのは、祐子夫婦が産後の挨拶にきた直後だった。妻は、男の上司として、いつになくスマートに振る舞った。男が、僕たち夫婦を手本にした家庭を築きたいというのに、大きく頷き微笑んだ。
「私たちもよい夫婦でいるため、当分頭を冷やしましょう。見送らないでちょうだい」
妻は夜更けにタクシーを呼ぶと、スーツケース一つで出ていった。子供たちは、当分実家に預かってもらい、必要なものはその都度取りにくるから、といった。
マンションには、手付け金を入れていたらしい。実家には帰らず、手筈どおり別居を実行したものと思われる。

煙草を吸い終えると、店を出るつもりだった。妻のことを思い出したことも、男に出会ったことも、妙に胸に刺さっていた。
僕のうちに、ある決心が生まれつつあった。
官僚を辞めることだった。
大学を出て、最も難しいとされる試験にストレートで合格し、エリートと呼ばれる省に入った。定年近くまで勤めると、代議士に推されたり、関連団体の理事長職に就くことになる。
三十代の前半で課長補佐職に就き、そろそろ課長の声が出始めている。
その職を辞める。
なぜなら、Sであった僕が、十日十晩の旅程に入る前に決めていたことであったから。
僕は、自分自身であるもう一人のぼくと出会い、エリートの地位を擲って、誰もが経験したことのない新たな石ころだらけの道に進むことを、自分自身で決めた。
もう一人のぼくと出会うこと。これが、全ての始まりだった。

次には、家庭を擲つこと。何年かかろうと、素の自分に戻らねばならない。全てのことは、素の自分に戻らなければ始まらない、と決めたのだった。

今、五年半前のことをいちいち説明する必要などないのだが、課長補佐職を辞めることは簡単なことだった。

記念植樹祭から戻り、出張報告より先に課長に辞表を差し出すと、慰留のことばもなく受理された。課長によると、とうに準備されていたといわんばかりに、後任の人事も時間を置かず決まった。

「これで、君の念願の事業が始まるということだな。おおいに期待してるよ。是非、頑張ってくれたまえ」

課長は、僕の手を強く握りしめた。

「昨日、君から辞めたいとのメールをもらったときは、眉唾だろうと本気にしなかった。しかし、君の壮大な事業の計画を読むうちに、これは本気だと確信した」

僕は、課長にメールなど送った覚えはなかった。もしかすると妻の仕業ではないかと一瞬考えたが、翌日に辞表を提出することを妻が知る由もなかった。まして、妻には官僚としての夫を失う必要はない。どころか、別れることを誰より嫌っている筈だ。

とすると、記念樹を運んできたもう一人のぼく（Yではない）か。

経緯はともかく、僕が差し出した辞表はその場で人事部に回され、午後には辞令交付式まで行われた。組み込まれていたタイムスケジュールのままに従ったが、長年座ってきた自分の椅子を離れるときは、さすがに辛かった。

特に、使い慣れたパソコンを終了させ、全国の首長たちに直接指示を出していた電話の前を去るときは、こぼれ落ちそうになる涙をこらえようと必死だった。

課員の誰もが僕が去ることを知っていたらしく、女子職員たちは花束を準備し、胸を詰まらせている者もいた。

記念植樹祭から戻ってきたぼく（Yではない）は、いったん自室に入ると、すぐに打ち上げの会場に出向かねばならないのだったから、作業着を脱ぎ、顔や手にこびりついた土を石鹸で洗い流し、県から与えられた赤いタオルで顔を拭い、使い終わったタオルは机の上に無造作に放り投げた。そして、シャツに着替えネクタイを締めた。後は靴を履き替え、髪を整えれば終わりだった。

一日の仕事の終わりは、パソコンを落とせばよかった。ぼくはマウスを終了に導こうとしたが、ふと心に浮かんできた自分でも意味のよくわからない文言を、普段はめったに使うこともないメールに急ぎしたため、息子に送ったのである。それに、一つだけ届いたら

しいメールに気を止めたが、どうやら間違って送られてきたらしい辞職云々といった内容のものを、本来の宛先であろう大学人事課に転送し、パソコンを閉じた。
胸のうちに、もう一人の自分であるエリート官僚の顔が浮かび、いつまでも消えようとしなかったが、呼びにきた部下が、タクシーが待っていると急きたてるので、小走りに部屋を出た。

僕（Y）は、もう一人のぼくが、打ち上げの会場に向かう途中、タクシーが交差点でトラックに追突され、結局意識が戻らないまま一週間後に命を落とすことを知っていた。
そのことを思いながら、課員の拍手に押され、役所を出た。出るときは、いつもと変わらぬ傲然とした態度を崩さなかったが、門を出た途端に歩道の小さな窪みに足をとられ転びそうになるのを、たたらを踏みながらすんでのところで止まった。
当てはなかった。
どうして、突然辞職したくなったのか。これからどうしようというのか。
僕は、官舎のある駅で下車することも忘れ、終着駅まで乗り過ごし、降り立った。
妻は、このことを知っているのだろうか。知っていたのだろうか。
海に面した町のホテルにチェックインし、僕自身が出したというメールの中身について考えてみようとした。勿論、自分自身が出したものでないことは間違いないが、このシナリオについて、夢の中のことではあるが、Sであった頃の僕は十分承知していた。承知しているどころか、十分時間をかけて準備したものを父や母や兄弟たちと何度も相談し、厳しい中身ではあるが、やりがいのあるとても良いシナリオだと納得していた。
その内容が知りたかった。正確なことが知りたかった。
知り得ないことだとわかっているのに、懸命に思いを凝らしていれば、なにかのきっかけが得られるのではないかと思った。
窓を開け、夜の海に向かって耳を傾けた。波の音が、潮の匂いが、僕に向かってしきりに囁いていた。高く低く寄せてくる波の音に混じり合い、その音は確かに聞こえるというのに、僕自身のうちにまで届かないのだった。必要なアプリケーションをもたないため、届けられた添付ファイルが開けないという状態だといったら、当たっているかもしれない。

僕が役所を辞めたことで、祐子が課を訪ねてきたということは風の便りに聞いたが、僕は当然のことながら、もう課の実質責任者である補佐でもなく、祐子と連絡をとるほどの厚かましさもなかった

から、以前何度もかけたことのある携帯に電話もしなかった。
祐子の、あの奇妙な穏やかさと、肌理の細かい肌の白さが脳裏になんの感興も呼ばなかったといえば嘘になるが、このままじっとしていさえすれば、祐子は官僚夫人として、かなりのプライドを維持していける筈だ。自虐的にではあるが、そう思いやる余裕はあった。
もっとも、僕が僕であるところの傲岸さと、生来併せ持つ卑屈さとが祐子に連絡をとらせなかった、というところが本音のところであったろう。
それより、僕は官舎を一定期限のうちに出なければならず、そのためには次の職を得る必要があった。新しい職に就くことは、僕が在職中に世話をした数十人の誰かに声をかければ、すぐにでも得られる筈だった。
しかし、彼らは一様に、退職した僕には見向きもしなかった。かつて蟻のごとく群がってきた彼らが、決して僕を支えてくれようとはしないばかりか、居留守を使ってまで会おうとしないのがわかった。
ある程度予測はしていたものの、そのことも僕のプライドをかなり引き裂いた。
数日後、妻の紹介の者だという人物が訪ねてきた。
放送会社の顧問にどうだという。妻は電波関係を束ねる職にあり、会社の首根っこを掴まえているに等しかった。
「御経歴からして、是非弊社にお迎えしたいとお願いに上がりました」
男の口上を聞いているうちはよかったが、妻には大いに世話になっているとの下りで、熱が急速に冷めてしまった。
「しばらく休憩して、もし自分に役立てる分野があればお世話になろうと思っています。なにしろ、辞めたばかりなので、頭の整理がつかないんですよ。とにかく、走り過ぎましたので、少々疲れているんです」
男は、安堵の表情を浮かべ、それでも是非その節は弊社をお選びいただけませんかと、いい残し帰っていった。
妻がどういうつもりで放送会社の者を寄越したのかはわからないが、夫の窮状を救おうということを通して、自らの力を誇示したいとの思いが見てとれた。それに、妻は当分離婚したくないのだ。そのためにも、夫はれっきとした職を持ち、健在でなければならない。
僕は、妻の意向を受けてきたらしいマスコミ二社の訪問を受けた。新聞社の解説委員に、という話にはかなり気持が動いたが、やはり、しばらくエネルギーの補給をしたいということばを返した。
このチャンスを逃せば、僕がどんなキャリアであれ、話はそうそうこないということはわかっていた。

案の定、再就職の話はそれだけで、官舎の貸与期限も迫っていたので、取り敢えず部屋の片付けと荷物の梱包にかかった。梱包にかかってみて、妻の荷物が殆どないことに気付いた。そのうち必要になったら引き取りにくるといっていたが、どうやらその必要はなさそうだった。

宛先のない荷物の梱包をして、初めて自分はとんでもない選択をしたのかもしれないと思った。職のないことなどたいしたハンディにはならないと思っていたが、そうなってしまうと世間がいかに冷たいものであるか、が垣間見えてきた。

宛先を書かない梱包を残し、部屋を出た。

官庁街で電車を降り、地上に出た。地上は、スーツに身を包んだ男たちが飛び走る勢いで歩いていた。女たちも、無表情で歩く。書類カバンを重そうに抱えた、一目で地方からの陳情組だとわかる群れが、地下鉄マップを睨みながら歩道の一角を占拠している。

数日前まで、自分は陳情組の話を半分程度に聞き、難癖をつけては出直すよう指示していた。コツは、一度や二度の陳情で容易に首を縦に振らないということにあった。陳情組も慣れたもので、話が一回や二回でうまくいくとは思っていない。そこで、地元選出の代議士とともに乗り込み、大筋で合意するという仕掛けになる。

元の庁舎前まできたとき、元課員の一人に出くわした。彼は僕を見かけると駆け寄り、笑顔で挨拶を交わしたが、別れしなに、会議の五分前ですので失礼しますと、大慌てで踵を返した。会議の名称は、かつて僕が議長を務めていたもので、その重要さもわかっている。しかし、組織を離れた者にもう用事はない、という意味であるのかとの穿った見方もできる。

ほかに、数人が会釈して過ぎたが、この場にいると、息が詰まりそうになる。誰一人、ためにする行動をとっているわけではないのであろうが、僕を押し出す方向の態度に出ているとしか思えないのは、単なる勘ぐりに過ぎないのだろうか。

官庁街を離れ、これまで歩み入ったことのない街並みに出た。

家電販売店、カメラ店、ブックストア、洋品店などが並ぶ商店街だった。家電販売店には覚えがあり、多分その本店の出入り業者からだったと思われるが、かつて専用のパソコンと携帯電話を購入した。そのパソコンと携帯電話に、昼夜を問わず連絡や相談がきていたのに、職を辞してからというもの、それはきっちりとない。

改めて、職場以外の誰とも無縁であったことが思いやられた。頻繁に鳴る携帯コールに悲鳴をあげていたことが、今になると奇怪なほどだ。

その携帯電話は、官舎の机の上に放り出したままだ。

表通りの賑わいから道路二本入り、ふと小さな事務機販売会社の前で立ち止まった。
「職員急募。経験無用」の張り紙が目に付き、ふらりと入った。
どうして、名も知らない事務機販売会社のドアを開けたのか、わからない。自動ドアが勝手に開き、たまたま吸い込まれたという具合だった。
コピー機や、机や椅子、書棚などが狭いスペースに並んだ店内に、人の姿はなかった。店内の電気も薄暗かった。節電のためか、半分の蛍光灯は灯されていなかった。
「やあ、失礼しました」
自動ドアが開いて、スポーティな恰好の男が入ってきた。
「申し訳ない。今倉庫から書棚を出し、荷を送り出したところでして」
男は額の汗を拭い、少しほくそ笑んだ。
「御用の向きは、あれでしょうか」
僕はなぜか頷いた。
「お待ちしておりました。即断即決ですね。ところで、あなたはよくテレビでお見かけしたことのある」
いいや、といいかけたが、
「財政緊縮に伴う三大経済政策改革提言の論調、見事でしたな。そこらへんのキャリアとは、一味違って。野性味を感じました。この頃の若者には、この手の迫力を見ずにいましたから」
男は、僕とそれほど歳の違わない年代だと思えるのに、そういった。
「マア、親父の代からの商売をやってるわけでして、エリートのあなたとは比べようもない。なんで、そこらの私大中退のわたしなんぞと組むのか、と思われることは無理もないことでしょうが、これもなにかの縁です」
男は、僕の採用を勝手に決めてしまった。
「なに、気楽にやってください。わたしらの目標はシンプルで、業界の中の競争といっても、まあ普通に泳いでいけば済みますから」
僕の配属先は、副都心の方にある事務所だった。
「よく働いてくれた社員が、親父さんが亡くなったということで、田舎に戻らねばならなくなったんです。親父さん、定年を半年後にして、事故だったといいますが」
僕は、あの林業手の男が死んだのだと知った。
男は、事故後救命センターで治療を受けていたのだが、頭部の傷が元で死んだのだ。
僕は官舎に戻ると、荷物の宛先を、取り敢えず会社の独身寮とし

た。
独身寮という響きが新鮮で心地よかったし、なにより次の職を得て、役所から離れられるということが幸いだった。
独身寮は、賄い付き、コインランドリー付きで無料といった、個人企業の持ち物にしては立派なものだった。先代の遺産で、まだ新築に等しいという。しかし、難といえば、共同生活を余儀なくされ、会社までの通勤に二時間近くを要し、僕が入居した部屋には、あの林業手の長男が住んでいたということだった。
結局三か月後、僕が身の回りの荷物をもって入り込んだのは、一Kのアパートであり、配属された支店に三十分かけて通うことになった。
仕事は、本社のオフィスにあったと同様のコピーや書棚などの事務機を中心に、それぞれの支店のアイデアのもとに、家電製品やカメラまで並べた機器の営業が主だった。
官庁出の僕に商才があるとはとても思えなかったが、支店長がくだけた人物で、僕に特別な目を向けることなく扱ってくれたので、スムーズに転身することができたといってよい。
休日も、寝る間もないほどに働きづめだった役所時代に比べ、半日を精一杯働くことで、給料は二倍になった。コピー機や書棚は、学校や官庁に大量に納入するルートができており、僕は新商品の説明をきちんとすればよく、納品は下請け業者が行ったし、据え付けも専門業者が行った。
迂闊なことに、入社して初めて知ったことだが、個人企業には違いないが、業界ではトップスリーの位置にあり、業績も悪くなかった。

妻から、離婚届が届き、その日のうちに判を押して返送した。役所に止まっていれば、決して別れるとはいい出さない筈の妻の方から行動を起こしてきたというのは、妻の勧める放送会社を蹴り、僕が得体の知れない事務機販売会社に職を得たからであることはわかっている。
結果として、第二の職場が妻との関係を明確にした。子供たちに未練はあるが、彼女らにとっても、妻の実家といき来しながら成長する方が、まだ幸せなことかもしれないと納得した。
妻も、役所で十分に力を発揮するには、この方が得策だと踏んだのだろう。

僕は、送り迎え付きの生活を長く続けてきたため、ペーパードライバーであったが、最初の給料を頭金にしてジープを買った。自分が見たい町にいき、見たいものを見、食べたいものを食べるためだ

った。
もう一つの目的は、海を見ることだった。月に二、三日の休日を利用し、房総や伊豆のあたりに出かけた。
高速道路を制限時速を超えるスピードで走り、普通車を次々に追い越していく。スポーツカーまで追い抜き、逆に抜き返され、また抜き去るといった単純なことに気持を奪われた。
房総の海は、いつのときも煌めいていた。広く、果てしなく、眠気を催しそうなほど長閑で、白い光の粒を幾万も埋め込んでいた。
僕の地元の海は北に広がっているせいか、いつも儚気に青く、透き通っているのだったが、南に開いた海は明るかった。透き通った青い海も嫌いではなかったが、光煌めく海は心を晴れやかにした。
役所時代の傲岸な物言いは、なんと了見が狭く、自分だけでなく、多くのことを融通の効かない世界へ導いていたことか。
帰りのジープでは、ヒットチャート曲を大きく鳴らし、ハンドルの手を上げ、大きな伸びをした。
客の応対も嫌ではなかった。些細な問いに応えることだけで、相手が満足しているという実感を得ることができた。
「君の成績はかなりのもんだ。社長から新しい社員が入ると聞いたとき、正直気乗りがしなくてね。超エリートの官僚上がりだというじゃないか。気が重たかったよ。理屈一辺倒の、偏屈野郎に違いないってね」
支店長は、商業高校卒だという。
「俺なんか体で営業を覚えた。なに、喧嘩に明け暮れてきたもんで、人に負けるのは嫌いな性分さ。しかし、君はたいしたもんだ」
頭髪をポマードで撫でつけた支店長は、敵にまわすとかなり厄介な存在なのかもしれなかったが、あっさりと僕を認めた。
負けるのが嫌いというだけあって、支店長の営業は妥協をしなかった。市場の動向をいち早く把握し、売れ筋の商品の仕入れには遅れることはなかったし、泡沫商品には見向きもしなかった。
事務機販売と銘打ちながら、浄水器の販売を手がけたり、マッサージ機や洗浄機能付き便器の販売にも手を広げた。浄水器もマッサージ機も、洗浄機能付き便器も、家庭やオフィスに必ずニーズがあると主張し、そのとおりになった。
店内にリラクゼーションの品を持ち込んだのも支店長で、他店にはないことだという。
僕は、第一支店と呼ばれるこの店が気に入った。店員十人足らずでしかないが、役所にはない明確な目標があった。目標といえば、つまるところは利潤の追求であったが、その過程に、柔軟な発想と工夫があった。

僕は、Ｕの書いた本のページを繰る。
何度読んでもよくわからない。理解を超えている、というべきか。公式の導き方そのものがわからないし、専門の科学者に見せても要領を得ない。つまり、物理学者の卵Ｕの独創世界なのだ。
しかも、ムー大陸とか、ナポレオンとか、マリーアントワネットとか、ヒットラーとかの、思わせぶりな名前が数千は登場し、それぞれに二十桁のＩＤが振られている。
ＹＥＳとＮＯだけでできた文章らしきものが、五十ページ余りも続き、ところどころページが欠落している。
僕がこの暗号集みたいな本に興味を持ち始めたのは、支店の一角を占めるゲーム機コーナーをときどき担当していたからだった。
まずキーを叩け。
何度も本を繰っているうち、Ｕのメッセージはこれに尽きるのではないかと思い始めた。
ドアを開け。そして、疑念を抱くことなく進め。そうすれば、徐々に見え始めるであろう。そもそも、論理で迫ることなど不可能に近い。
約めて読めば、どうもこうなるらしい。
この一年というもの、紙質も印刷もよくない本のページを何度となくめくり、半分くらいとばし読みしてきたのだった。
タイム・スクリーンへの誘いという章によると、時間、空間への入口は無数にあり、(一)なんの障壁もなくスッと入っていける場合、(二)自身がその条件にあることを信じさえすればたちどころに入っていける場合、(三)特別な能力者の力を借り、入っていける場合、(四)バーチャルな経験を重ねていく中から能力を修得し、入っていける場合、(五)自らのスピードを光の速さ以上に速めることで入っていける場合等々、方法そのものも書き出しきれないほどあるらしく、その他の方法は、一つの山の頂を目指すルートが無数に存在するのと同様に、カウントすることはできないと結んである。
僕は、比較的容易ではないかと思われる、バーチャルな経験を重ねていくという方法にチャレンジしてみることにした。
林業手であったぼく（Ｙではない）が、植樹祭のときに首にかけていた赤いタオル。タオルに刻まれたアルファベットと数字からなる二十桁の記号番号がまざまざと脳裏に蘇った。なにかの糸がほぐれ始めるかもしれない、という予感めいたものがあった。

中古のパソコンを立ち上げた。古本屋の亭主がくれた十年近く前の、型式も能力も最新型からみると数段劣る代物だ。
亭主は、Ｕの本と一緒に、埃をかぶっていたこのパソコンを、まだ使えるかもしれん、といってくれた。

パソコンは、実際、頼りなげに立ち上がった。
デスクトップに設けられたショートカットをクリックすると、気が遠くなりそうなほどの遅いスピードで、それでも最新のニュースを読み込み、かすれた音のミュージックを流した。
「マジかよ」
普段使っているパソコンに比べ、スピードは十分の一にも満たず、そのためかソフトウェアというものも殆ど組み込まれていない。
僕は、旧式というほかにはなんの特徴もなさそうなパソコンを閉じようとし、デスクトップに一つだけ設けられたフォルダをクリックした。
フォルダの名前は、「扉」となっていた。
フォルダをクリックすると、最初電源が落ちたのかと思わせる黒い画面になり、「氏名」、「住所」、「勤務先」といった数項目の記入を求め、続いていくつかの記述項目に付き合い、さらにＹＥＳかＮＯの選択をしていくと、「ＩＤ」とのみ記されたボックスが現れた。
試しに、Ｕの残したＩＤの一つを打ち込んでみたが、打ち込む端からＩＤは消され、なんの変化もみられなかった。
「とんだポンコツだ」
僕はパソコンを閉じ、Ｕの本を床に放ろうとした。
そのとき、頭の中を赤い稲妻が過ぎった。あの林業手が首に巻き付けていたタオルに書かれていた記号。
一つの謎を解いたという思いだった。
その二十桁のアルファベットと数字を、パソコンに打ち込んだ。
すると、画面に夥しい星状の粒が現れ、右から左へ、手前から奥へ、地平から上空へと、ゆるやかなスピードで流れ始めた。
星の渦の中に、ＩＤを入れる箇所が無数にあり、僕は今度、さきほど入力してなんの変化もみせなかったＵの残したＩＤの一つを入れてみた。
突然、グアッという衝撃とともに、パソコンが破裂したと思った。煙があたり一面にたちこめ、目を開けることも息をすることもできない。
きな臭い臭いが胸を刺し、血飛沫が飛んできた。
目の前に弾が落ち、あたりの人々を吹き飛ばしたのだ。千切れた手足、裂けた腹、砕けた頭蓋、見る間に夥しい血の海ができていく。
僕は、恐る恐る自分の手を抓り、足をさすり、顔を撫で上げた。
この目の前の出来事が、実はパソコンの中だけでのことだと気付いたのは、いったいどれだけの時間が経ってからのことだったろうか。
気が付き、あわててＩＤの解除というＵの本の箇所をめくり、キーを叩くと、殺戮の惨状はふっと消えた。

溜め息をついた。
既に、プログラムは作られているのだろうか。
急いで、Uの本の付箋を付けたところをめくってみる。記号と公式に埋められた中の、わずかな記述の部分だ。
「九十七パーセントの実証作業の準備を終えた。残るは、現次元の時間・空間と装置を連結することだけだ。時間の底に未来があったり、頭上に過去があったりする。いや、過去も、現在も、未来もない。あるのは今だけだ。また、見かけ上、宇宙は猛烈なスピードで互いに遠ざかっているというが、それはとりもなおさず、今が果てしなく連続していくのであるから、そう理論を展開せざるを得ないものであり、われわれは今という時に、瞬時に宇宙を一周して元の位置に立っているのだという考えに立てば、多少の理解が得られるのではないだろうか」
頭の中が支離滅裂になる。今しかないという時間が、CTスキャンの画像を並べたカタチに、際限もなくスライドしていく。
玉乗りの芸人が、前後左右に揺れながら、絶妙なバランスをとっているという光景が、脈絡もなく目の前に浮かんだ。
「今しかあり得ない。宇宙の裏側は、宇宙の表面と同一であり、かつ、上でも下でも、前でも後でもない」
Uは、ページの同じ箇所に三度も同じ表現を用いている。

僕は、古びたパソコンから離れ、Uの本の付箋の箇所をもう一度読み返す。
そもそも、Uはなにゆえにこの本を著したのか。わが国の最高研究機関にあって、学界では殆ど顧みられることなく、精神病院で若くに命を閉じたUという物理学者の卵。
「過ぎ去った未来、いつでも出会える過去への誘い」
とでも銘打つべき、欧文のタイトル。装丁も粗末な、黄ばんだ本。パソコンで検索してみたところ、国立国会図書館には所蔵されているものの、その他の図書館のどこにも存在しないらしい。しかも、前書きも、後書きもない、一見資料集とでもいうべき内容。
そして、パソコン。本が一九八×年の作であり、パソコンがそれから数年後の作とみえることから、Uは、このパソコンによって、十年ほど前にプログラミングを行っていたということになる。
僕の脳裏に、髪の毛や髭は伸びるにまかせたまま、敷き放しの布団のある部屋で、恐らく痩せぎすの男が、寝る間も惜しんでキーを叩いている様が浮かんできた。Uは息をすることも忘れ、自分が二十世紀の末に存在しているということさえ忘れ、作業に没頭していたのかもしれない。
つまり、Uは、数年前に死亡するまでの間、僕が生きてきたとほ

ぼ同一の間、同じ空気を吸い、同じ時間を共有してきたのだ。
Ｕが残した本とパソコン。
どういう経路で古本屋の棚に置かれることになったのかはわからないが、夢の中でみた僕自身のシナリオによると、この一時点に僕は現れ、Ｕの残したタイム・スクリーンを引き継ぐということになっていた、ということを朧気ながら思い起こす。
Ｓであった頃の微かな記憶では、Ｕのやり残したプログラムを完成させ、今の時空と、Ｓであった頃の時空とを自由に往来できるようにする、ということになっている筈だ。
最高学府の学者たちが、ゲームに過ぎないと酷評したＵの理論と、それをバーチャルに表現するために組まれたプログラム。
勿論、Ｕが自らいうように、理論の方は置いて、プログラムは、九十七パーセントまでしか出来上がっていないらしい。
多分、このプログラムに、今という時のＩＤを組み込むことで、Ｕの理論は現実のものとして表現され、実現することになるのだと想定される。
そう、「過ぎ去った未来、いつでも出会える過去」のうちを自由に往来し、瞬時に宇宙空間を移動することが、可能になる。僕がＳであったとき、現にそうであったとおりに。

ベルが鳴っている。何度も繰り返し鳴る。
最初電話の呼び出しかと思ったが、玄関のチャイムだった。なにしろ、このアパートを訪ねてくる者などめったにないので、勝手が違った。
ドアの外に、若い男が立っていた。
「いつか植樹祭に出ていらした方ですね」
男があの林業手の息子であることは、すぐにわかった。面長の顔立ちと、目の色と、声が林業手にそっくりだった。
「あなたは確か、以前事務機販売会社にいらした」
「ええ、五年ほど前になります。父が亡くなったものですから、実家に戻り、母と一緒に暮らしています」
男を応接間に通した。
「お母さんと二人で」
「実家に戻り結婚しましたので、娘もいます」
「実家に戻らねばならない理由でも」
「ええ、不思議なもので、父が亡くなる直前に、メールをくれたんです。メールなんて苦手で、殆どさわることもないといってたんですが。初めてもらったメールの内容が、びしりと重たいもので」
「ほう」
「なぜ、あんな遺書めいたものを書いたのか、と考えました。なに

か、虫の知らせでもあったんだろうかと」
　男は、黄色に変色しかけた紙を封筒から取り出した。メールの本文らしかった。
「お父さんにもしものことがあっても、決して取り乱さないように。そのときは、悪いけれど家に戻り、しばらくお母さんの傍に付いていてほしい。少なくとも、五年間は。ついでに、是非聞いてもらいたい願いがある。五年後に、いつも使っている金庫の中にある手紙を、ある人に届けてほしい。その人は、植樹祭に出た直後に職を辞す人で、大切な仕事をやり遂げなければならない。その仕事のため、金庫の中の手紙が必要になる」
　斜め読みをしてみると、そんな内容が読みとれる。メールの最後に、山口孝夫という名前が記されており、まさしくメールの日付、時間は、植樹祭当日の夕方になっている。
　山口孝夫の長男の良太と名乗った男は、実直そうな目をあげると、胸ポケットから、これも黄ばんだ封筒を取り出した。
「封などしていないので読んでみたのですが、これがそんなに大切なものなんでしょうか」
　良太の表情に、怪訝そうな色が浮かんだ。
　手紙には、「この二十桁の記号番号が、きっとお役にたてると信じます。私には、これをなににどう用いるのか全くわかりませんが、六十年間というもの、頭の中にこびりついている暗号なのです」とある。
　僕も、この二十桁の記号番号がどう用いるべきものであるかわからないが、タイム・スクリーンの作業を進めるために不可欠なものであろうことだけは、それと知れた。
　用向きが済んだとみて腰を浮かしかけた良太を引き留め、街に出た。自分がまともな食事をしていないこともあったが、わざわざ訪ねてくれた林業手の息子をそのまま帰すのは、しのびなかった。

　並んで寿司屋の椅子に腰掛け、ジョッキで乾杯した。
　話しているうちに、良太と僕とは同じ年の生まれで、誕生日は僕が三日早いだけだということがわかった。
「あなたに比べると、しがない私大卒ですから。なにしろ、就職も殆ど名の知れていない事務機販売会社で」
　その会社に在職しているのだというと、初めて知ったことらしく、「エリートのあなたがどうして」と目を丸くした。
　僕は、役所を辞めるに至ったくだりを話そうとして詰まってしまった。考えてみると、役所を辞めなければならなかったこれといった理由が思い当たらない。
「植樹祭に出るまで、辞めるということはこれっぽっちも考えなか

った。ただ、奇妙な隙間の中に、ふいに」
　といいかけたが、ビールを飲み下し、もう一口飲んで、「親父さんに会ったとき、何故かそうなるのだというインスピレーションを感じた」といった。
「それは、父がお願いしたものですか」
「違う。僕自身のなかに眠っていたものを思い出した、ということかな」
「どこかで、父との接点があったという」
「初めてもなにも、植樹祭の場で、本番になって一メートル弱の距離で出会った。時間にして、三分の間」
　そうなのだ、と改めて思った。山口孝夫という林業手に出会わなかったら、僕は今も役所にいて、部長ぐらいになっている筈だ。
　植樹祭ということなら、十数回の経験があったし、場所も北から南まで、偏ることなく出かけていた。
　第一、山口孝夫という名前だって今知ったぐらいで、本来、あの日の植樹祭で進退を考えねばならない理由などなに一つなかった。
　僕は、植樹祭のこと、事務機販売会社のこと、古本屋のこと、物理学者の卵であるUのことを手短に話した。
　良太はジョッキにかけた手を止めて聞いていたが、「古本屋に最初にコピー機を納めたのは私で、亭主とは会うたびによく世間話をしたものです。しかし、あの亭主にそんな秘密めいたものがあるとは考えもしませんでした。もしあったとしても、多分、私に対しては、Uのことなどおくびにも出さなかったのではないでしょうか。それとも、あなたが亭主の元に出向いたときに合わせ、Uの本とパソコンが舞い込んできたのかもしれません」といった。

　空きっ腹にビールを流し込んだためか、一気に酔いがまわってきた。少しろれつがまわらなくなっていた。
「出来すぎている。なんの気持の準備もなく、植樹祭で親父さんに会った。役所に戻ると、既に辞める算段になっていた。その間、親父さんは事故で命を落とし、役所を辞めた自分は偶然通りかかった事務機販売会社に拾われる。しかも、会社は親父さんの息子が寸前まで勤めていたところだ。会社の営業で、古本屋の亭主を知り、たまたま手に取ったUの本が、親父さんからの暗号によって、始めて意味をなす。そういうストーリーって、凡人には考えもつかない。なにかに魅入られたとしかいいようのない、ブラックゲームだ」
　僕は、そんな類のことを店中に聞こえるほどの大声で喋った。
　良太も、「父からもらったメールといい、金庫の中から出てきた暗号といい、誰かの悪戯じゃないかと疑いましたよ。だって、父は農業高校を出ただけの、愚直さだけが取り柄の人間でしたから。だっ

て、こんなに手の込んだシナリオの当事者だなんて、どうやって信じます。今日届けた手紙にしろ、冗談だとばかり思ってました。たまたま父の五年の法要をしているとき、植樹祭のことが話題になり、見本林の後輩に当たる人が、父はあのとき高級官僚の方の持ち場についたとの話をしてくれたんです。それも、当初は知事か代議士をサポートすることになっていたらしく、それが本番直前に、持ち場に営林局の人が割り込んできたため、順番が一つずれたのだったと聞いたものですから。念のためにと思って、当時の資料を確かめてみたのです。すると、話のとおり資料とは異なった位置に配置されたということがわかり、あなたの名前にいき着いたのです」

良太は、蛙の子はなんとやらというのか、見本林の臨時雇いで細々と生活をしているのだといった。

「臨時雇いですが、机は一人前に与えられていまして、父が使っていたパソコンも私に割り当てられました。しかし、なぜか、パソコンの情報は全て消去され、つまり、初期化されていて、そのせいかどうか、元のＯＳを入れても立ち上がらないんです。結局、修理不能ということで、当時父にどのような情報が入っていたか、どのような情報を発信したか、なに一つわからないままです。職場にお願いして、しばらく廃棄するのを待ってもらってはいますが」

僕は、山口のパソコンには、今目の前にしている暗号が送られ、今日の日に至るように指示がなされていたに違いない、と思った。

酔いのまわった頭の隅に、かつてＳであったというときの光景が微かに過ぎり、そういえばそんなストリーを学習したのではなかったか、と思えてきた。

山口も、僕も、一人のＳだったのだから。

一人のＳが、この世界に現れるため、二人の肉体を持つ人間として降りてきた。Ｓであったときの僕は、それらの全てを知り、十二分に訓練に訓練を重ね、降りてきた。

そこまで考え、これは夢の中でのストーリーだったなと、改めて思い直した。

「偶然にしては、話が出来過ぎている。登場人物は、親父さんと、僕と、君と、古本屋の亭主と、Ｕと、後はなんだろう」

僕は、妻や娘のことを考えた。祐子のことを考えた。彼女たちは、どういうストーリーのもとに僕と関わってきたのだろう。

タイム・スクリーンが完成すれば、全ての仕組みと意味がわかる。Ｕの本の内容を一言でいうなら、そういうことだ。

「妻と出会ったのも、父が危ないというので大急ぎで帰郷した病院でなんです」

ほう、と僕はいった。

「妻、いえ当時は見も知らない相手だったんです。彼女は、二トン

トラックの運転手でしてね。東京から一晩かけて街まで衣類を運んできて、交差点に入ろうとしたとき、突然タクシーが目の前に潜り込んできたというのです。急ブレーキを踏んだが、間に合わなかった。彼女は震えていました。父のベッドの端で、頭を垂れただ震えていました。加害者なんです、彼女。許せなかった。出ていけと怒鳴ったんです。しかし、肩を落とし出ていく彼女を引き留めた。そのまま、自殺でもしかねないと思ったからです。父は、傷らしい傷は殆どなく、苦しい様子もない。安心して眠っている、という表情でした。結局、再び目を開けることなく、一週間後に息を引き取りました。彼女は、父の手にすがりついて声を殺して泣いていました。そう、一週間ずっと付き添ったまま、離れようとしなかった。それが、妻です」

うん、と頷いたのだったか。僕は、これだけ緻密に作られたシナリオはないな、と酔いのまわった頭の奥で一人頷いた。

陽が落ちる頃、アパートのまわりを歩くのが日課になった。

Ｕのパソコンと格闘を始め、Ｕの本を睨み、これと思われる式を加えたりしたものの、最初にＩＤを入れたときのあの変化より先に進む気配もなく、いつ画面が消えてもおかしくない不安定な状態を、かろうじて保っているのだった。

良太が持ってきてくれたＩＤを、プログラムらしい数式のあらゆる箇所に入力してみたが、反応はなかった。入れる箇所によっては、突然画面が揺らぎ、焦げ臭い臭いがし、元々能力のよくないパソコン本体が喘ぎ始めてしまうのだった。ハードディスクを追加し、メモリを交換しようとしても、外部機種を全く受け付けようとしなかった。それだけ旧式の機器であり、一度店に持ち込んだが、部品の全てが製造中止になっているということだった。

耳の奥で、いつもなにかが鳴っていた。

ときおり窓の外を眺めながら、一日の殆どをパソコンと格闘しながら過ごし、夕暮れ前だけ、息抜きのため戸外に出た。

戸外は、秋の気配に満ちていた。

街路樹の欅並木の葉が、真上からの陽射しに葉脈を染め、残り日を惜しむかのごとくにしなをつくり始めた。アパートのすぐ裏手で始まった架橋工事の音も、既に反対車線側に移ってしまった。

耳の奥でいつもなにかが鳴っているという気配が、戸外に出ると止んだ。胸いっぱいに吸い込む空気が、甘かった。どこかで、金木犀が匂っているのかもしれなかった。

いろんな人がいるものだな、と初めて気が付いた。

アパートを出たばかりのコーナーに、小さな宝くじ売り場があり、

買い手の姿を殆ど見たことがないというのに、三億円が出ました、一億円二本が出ましたなどと、大きな赤字の札が貼られている。一坪ほどの売り場には、六十年輩の女性がいて、目線を合わせるたびに肉饅頭そっくりの頬を崩し、笑顔を返してきた。

少し歩くと、携帯電話の店があり、若い店員二、三人が、決まって五人ほどの客を相手に笑顔を振りまいていた。

バスのターミナルまで歩くと、この停留所を発し他県の県庁所在地までいくという夜行に、リュックを背負った若者たちが幾組も乗り込んでいるのだった。

ターミナルの裏には、表通りからは気付かない深い木立があって、小さな鳥居をくぐって入ると、掃き清められた境内に出た。境内はかなりの奥行きをもっていて、表通りの空気とは違う密度の濃い空気が漂っていた。

境内を抜けると、飲食街になっていて、飲み屋が開店準備を始めていた。和牛の店、活き造りの店、居酒屋と、人の群れを受け入れる準備に余念がないのだった。若い店員が、ジーンズ姿で玄関に水を撒いたり、ドアの雑巾がけをしていた。

飲食街がかなり長く続いた後、交差点を挟んでオフィスが立ち並んでいた。銀行、証券、旅行、デパートというふうに、この街の中心部へと向かう。

僕は、交差点を渡らず、十分ほど行き交う人々の姿を眺め、Uターンした。

近くのコンビニで弁当や、カップ麺を買って戻ると、湯を沸かし、夕飯にした。

随分バランスのよくない食生活だとは思いながら、後半年も食いつないでいければよいのだと考えた。

タイム・スクリーンが完成したら、自分の任務は終わる。シナリオは終わるのだ。

勝手に、そういい聞かせていた。

妻や、僕のＤＮＡを受け継いだ二人の娘たちも、僕がどこでどうなろうと、関係ないだろう。役所に籍を置いていたとしたら、マスコミの連中が放っては置かないかもしれないが、今の僕には、どんな死に方だって許されるのだ。

手持ち金も、恐らく後一年ともたないだろうし、保険にも加入していないので、医者にかかるのにも具合が悪い。いや、かかるつもりはない。

こうやって、カップ麺ばかり食べ、どこか酩酊した状態で過ごす。そう、Ｕがパソコンと格闘していた頃の生活は、敷きっぱなしの布団にくるまり、髪の毛も髭も伸ばし放題のまま、二晩も徹夜したか

と思うと、真昼に涎を垂らして眠るという、多分今の僕と似通ったものだったに違いない。

Ｕに近付こうという切実な願いがある。Ｕがたどり着いた域に、できるだけ早くたどり着きたい。

Ｕの本は、まさに魔力に溢れている。そう気付いたのは、ほんの最近のことだ。

魔力、そう、Ｕは間違いなく天才であり、疑いようのない異常者である。しかし、間違いなく天から下ったかなりのエネルギーを手中にしていたに違いない。

光、量子、重力などの世界を超えてしまう強烈なエネルギーを、といえば、最もＵを、Ｕの世界を表現するのに適しているのではないだろうか。

「過ぎ去った未来、いつでも出会える過去への誘い」

Ｕの本が放つ、いようのない呪縛が、僕を纏い始めている。それは、秘密を覗いた者がその域から逃れようとすると、容赦なく抹殺してしまうという秘密結社の掟にも通じるものがある。

とにかく、僕には進むよりほかに道はない。

カップ麺を半分残し、パソコンに向かう。

電源をＯＮにすると、立ち上がるのに二十分を要し、頼りなげに画面が揺れ続ける。これが、はたしてパソコンと呼べるものであるのだろうか。壊れかけたゲーム機の類ではないのかといぶかったこともあったが、型式はパソコンのそれに違いない。

ハードディスクの容量は今の標準のものに比べ、十分の一足らずで、メモリもそのレベルだから、なにしろ時間がかかる。反応があきれるほど遅い。そのくせ、ハードディスクは忠実に任務をこなそうとし、いつも歯ぎしりに似た音をたて、唸る。

僕に、多少でもＩＴについての心得があったなら、組み込まれたプログラムを新しいパソコンに移せるのかもしれない。

しかし、目の前のパソコンは、奇妙な音をたてて唸り、ストレッチでもしているのか、使用者の僕に次の正確なメッセージを入れるのを要求してくるといった状態を崩さない。

久しぶりに、ぼくである山口孝夫がタオルに記していたＩＤを入れてみた。最初のときに、いきなり、グアッという衝撃とともに、パソコンが鳴動し、煙があたり一面にたちこめ、目を開けることも息をすることもできないきな臭い臭いが胸を刺し、血飛沫が飛んできたときの場面を再現してみようとした。

ＩＤを入力してみる。

反応がない。

もう一度入力する。やはり、反応はない。
この間、何十回も同じＩＤを入力し、試みてみたのだが、あの爆弾が炸裂し、手足が千切れ、腹が裂け、という場面には出会わない。
なにかの法則があるのかもしれない。同じＩＤに反応するとしても、なにかの規則性がきっとある筈だ。
僕は、Ｕの本を開く。公式を読む。
実証作業の仕上げまで、後三パーセントの仕事が残されている、という意味のことが記され、突然後の記述が途絶える。その同じ箇所で、何百回立ち止まったことか。
「そうすることによって、『過ぎ去った未来、いつでも出会える過去』に、容易に入ることができる。理論は、百パーセント完成している。残るは、そのことを現実に体験することのできるマシーンの完成だ。勿論、一つの山に登るのに無数の道があるごとく、マシーンの完成だけが問題ではない。ただ信じるという方法だけで、『過ぎ去った未来、いつでも出会える過去』に簡単に入ることさえできるのだ。いうまでもなく、理論は完璧だ。理論は、既に創造主の寝乱れた姿さえ映し出すことができる」
というくだりが続く。
天才といわれたＵの頭脳に、稲妻に似たヒビが走り始めた時期に書かれた部分であろうと、当時のＵを知る教授に教えてもらった。
教授は、Ｕとは郷里も近く、生い立ちから最期までを、もっともよく知っているといわれる、現在の物理学界の大御所だ。
「Ｕの頭脳は、ＩＱなどで計れるものではありませんでした。未来を知っている。過去も知っている。それは、なにかの計算で割り出したとか、データを駆使して解答を導く、などということとは全く異なり、Ｕ自身が今経験していることを、間髪を入れずに表現していくという方法で、われわれの前に提示するのです。しかし、それがまさにＵの悲劇でもあるのです。Ｕのことばに信憑性があるらしいことがわかればわかるほど、客観的な論拠や証拠、つまり資料の提示を求めずには済まないのです。Ｕは、私たちの顔を、いったい何度、なんという哀しい目でみやったことでしょう」
教授は溜め息をつき、
「学問の保守性、学界の排他性、人間という存在の浅ましさが、Ｕの頭脳にヒビ割れを植え付けていったのかもしれません。もっとも、Ｕ自ら、遅かれ早かれ、その頭脳にヒビ割れを作らないことには、存在すること自体が危うい領域に近付くことになったと思われますけどね」
唇を引き結び、それ以上をいってはならないのだ、と小さく首を振り、教授は足早に離れていった。
それは、数週間前のことだ。

僕の母校であり、Uの母校でもある大学の物理学教室を訪ね、教授に面会した。教授とは初めての対面ではなかったが、僕がUの残したパソコンを手に入れたということが、教授のこのことばを引き出したのだった。
「悪いことはいいません。そっとしておいた方が、きっとあなたのために、いえみんなのためになりますね」
別れ際に、教授はそう囁いた。

祐子から連絡が入った。祐子の声を聞くのは、五年ぶりだった。
「もし、お忘れでなかったら」
祐子の声は沈んでいた。
どうして僕の住所と電話がわかったのか。それも、なんで今なのだろうか。
目の前に、五年前の、いや六年前現に僕の手の中にいたと同じ祐子がいる。ちっとも変わっていない。ただ、子を持つ女のしなやかさが全身を包んでいた。
「なにか変わったことでも」
喫茶店の窓際に席を取ると、伏し目がちな祐子の顔を覗き込んだ。形のよい小さめの唇が、一メートルの距離にあった。なにより、少し横を向いたときの鼻梁から唇にかけての輪郭が一段と美しさを増していた。
「お詫びしなくては」
祐子は、ややあってキッと視線を上げた。
「息子は、補佐の子供です」
僕は、あんぐりと口を開けていたのかもしれない。
「申し訳ありません。結婚して、一年目に生まれた息子は、補佐の子供です」
「そんな」
「補佐には、一年目に生まれたという報告をしましたが、出生はその二月前なのです。届け出は、その二月前に済ませています。主人も、自分の子供ではないことは知っています」
「馬鹿な」
「結婚式の数日前、補佐と最後の夜を過ごしました。私は、可能日であることを偽り、補佐には安全日だと申し上げました」
あの晩のことを思い出した。
「今、授かったのだと感じました。もっとも、それは女の勘にしか過ぎませんが」
「でも、なぜ」
「補佐になにかをお願いしようなんて、考えたこともありません。ただ」

「ただ」
「ええ、主人とは殆ど。最初の二月ほどだけ」
僕は唸った。祐子の大理石の色に似た肌を思った。
「主人が帰宅するのは、いつも十二時を過ぎます。そして、六時には起き、出勤します」
祐子は、夫の忙しさのことをいっているのかと思っていると、「主人が帰る家は、私の元ではないのです」といった。
僕は、全てを察した。
祐子の夫が帰るのは、僕の妻のところだ。祐子たちの結婚式の日、妻の表情がこれ以上はないというほどに輝いていた。
祐子は、紅茶を半分残したまま帰っていった。振り返らなかった。
僕の心の中で、一枚の青磁の皿がふっと舞い落ち、砕け散った。

良太からメールが届いた。
「大切なことを忘れていました。父からいつも聞かされていたことです。タイム・スクリーンについてです。Uが開発しようとしたタイム・スクリーンは、Uの能力をもってすればたわいもないことだったのではないかということです。これは、私の勝手な憶測なのかもしれませんが。もともと林業手でしかない父が、Uのことなどまともに知り得たとは思えません。しかし、父は見本林の中で、たびたびUに出会ったらしいのです。もっとも、父の表現を借りれば、ホームレスの仲間にということになりますが。Uは（Uに違いないと、ほんの今気付いたばかりです）、見本林の端に置いてあるベンチに寝そべり、ときには息をするのさえ止め、目玉だけを宙に彷徨わせていたと聞きます。蓬髪を風になびかせ、目玉だけを動かし、手足をだらりと投げ出し、という異様な風体に、父は最初の頃何度か一一九番をしたといいます。ところが、Uは救急車がくる直前に、決まってスッと姿をくらますのだそうです。それだけのことですが、ただ見本林の若い職員の一人が、Uの頭上に虹が架かるのを見たといいます。多分Uは、『過ぎ去った未来、いつでも出会える過去』のうちを、度々訪れていたのではないでしょうか。この話を何度も聞かせてくれた父のことを、思い出しました。父は、Uが去った後のベンチに腰を下ろし、その一角の清々しい気に打たれ、ただ者ではないと思ったといいます。Uが寝そべっていたベンチの周囲では、樹木が一気に三年の成長をしてみたり、古木が柔らかな目を出し、花を咲かせることさえよくあったといいます」
良太のメールのこの部分は序文に過ぎず、
「これは、戻ってから考えた私の憶測にしか過ぎませんが、Uはタイム・スクリーンを完成していたのではないでしょうか。完成し、発表しようとしたのではないでしょうか。しかし、激しい抵抗にあ

った。例えば、薬を打たれ、コンクリートの壁で閉ざされた場所に監禁された。Ｕの頭脳にヒビが入り始めたのは、その頃からではないでしょうか。こう考えると、なにかがスッと抜けていくのです。というのも、父の遺品を整理しているうち、宛名のない一通の手紙を見つけたのです。この手紙は、鍵などかけない父の引き出しに無造作に入れられていたもので、始めからその存在には気付いていました。今回、改めて中身を確かめてみようとして、Ｕからのものだ、となぜか確信するものがありました。中身には、閉ざされた部屋からみる空の色のことが綴られていますが、あいかわらず意味不明のアルファベットや数字が並べられ、便箋七枚にもわたっています。Ｕが亡くなる半年ぐらい前のものだと思われます。なぜ、父の元にＵの手紙が存在するのかという疑問は置いて、何度も字面を眺めているうち、その中の一行に釘付けになったのです。その一行を記します」

とあり、やはり二十桁のアルファベットと数字が交互に並んだものが、最後に記されていた。

僕は、思わず唸った。ぼくである山口が、僕に残したメッセージに間違いないと、直感した。

山口は、良太に僕と会うことを勧めた。山口自身が勧めたものかどうかはわからないが、良太と僕は一つの点で出会った。

時間と空間が織りなすというタイム・スクリーンの、その定められた一点において。

僕は、良太の確信は恐らく間違いのないことだろうと考える。どういう意図で、どういう経路で、Ｕの手紙が山口の元に届いたのかは置くとして、古本屋の亭主を介し、Ｕが僕の胸に一本の矢を放ったことは間違いないものと信じることができる。

Ｕのパソコンに向かい、いつものとおり、僕の頭文字Ｙを記し、ＩＤを求めるところまで進んだ。

良太が寄越した二十桁の記号番号を記入する。

記入した文字群が、すぐに弾き出されてしまうのか、なんとかプログラムの中に潜り込んでいけるのか。なにかが沸騰し、なにかが腐りゆくのに似た臭いが漂い、黒の画面のまま五分、六分と時間が過ぎる。

ハードディスクが悲鳴に近い唸りをあげ、千切れそうな機械音までたてるものだから、僕はパソコンの心臓部に異変が起きたのではないかと、何度主電源をＯＦＦにしようとしたかしれない。

いきなり、画面に稲妻が走り、耳をつんざく轟音がしたかと思うと、かすかに「次へ」という文字が地底からせり上がり、徐々に鮮明な画像へと変わっていく。そして、Ａ、Ｂ、Ｃという文字が点滅

し始めた。
生唾を飲み下し、僕は、Uのプログラムのどこかが動き始めたのかもしれない、とあわてて本のページを繰った。
しかし、どこを繰ってもこの画面について触れている箇所はない。
パソコンは、A、B、Cの文字を画面いっぱいに押し出し、唸りは相変わらずであるが、機械音は消え、とにかく、次の選択を迫っているのだった。
とうとう、Uのタイム・スクリーンへのルートに乗ったのであろうか。向かい合っているのは僕だけであるから、そう感じる、としかいい表す術がない。
僕の頭の中を、アパートもろとも吹き飛んでいく自分の姿が過ぎったが、もとより恐怖などない。そういい切れば嘘になってしまうが、進むよりほかないのだ、といい聞かせた。
A、B、Cのどれを選択するか、逡巡した。その逡巡の間に、エリートといわれる官僚であった自分、今も中央官界の中の流れを泳いでいる妻、二人の娘、大理石の色に似た滑らかな肌をもった祐子、出会ったことのない祐子の子供、ぼくである林業手の山口、息子の良太、古本屋の亭主、精神病院で死んだというUらの面影が目の前を走り、Sであった頃の自分の顔をまじまじと思い出し、父や母の顔まではっきり思い浮かべた。
それが、はたしてどれだけの時間であったのか。十分か、二十分か。あるいは、一秒にも満たない時間だったのかもしれない。

僕は、無意識の中でBを選択した。
途端に、なにかが木端微塵に砕けた。
僕を取り巻く全てが、木端微塵に宙に放り出され、猛烈な勢いで空間を走る。あわてて目を開いた僕の前に、巨大な暗黒の空間が広がる。茫々と、果てのない空間だ。
ああ、今アンドロメダ座大星雲が誕生したのだ、という誰かの声が高らかに響く。一ミクロンにも満たなかった星の卵のエネルギーが、今封印を解かれたのだ。
放たれたことばが駆けめぐり、冷や冷やとした光景がゆっくりと四方八方に伸びていく。
一転、場面が変わった。
恐竜族の頂点に立ったチンタオザウルスの首長の演説が、佳境に入った。
「われわれ同胞の、幾世紀を費やし、幾多の屍を乗り越えた、英雄的な血と誇りと汗の成果が、今完璧に成就した。決して忘れることのできない憎悪をも呑み込むという、われわれの偉大な叡智によって、永遠に止むことはないと思われた戦火の時を脱し、未来永劫に

続くべき道に、われわれは、まさに今到達した。この勝鬨を、謹んで天に捧げるものである」
チンタオザウルスの首長は、長い演説を終え、マスコミ陣のフラッシュを滝のごとくに浴びながら、最も天に近いといわれる山の頂から、世界に向かって力強く宣言した。
そのことばが、終わるか終わらないかというときだった。チンタオザウルスの首長を始め、全世界で首長のことばを歓喜の喝采とともに聞いていたチンタオザウルスたちは、瞬時に、そのままの姿勢で凍り付いてしまった。
恐竜族の長チンタオザウルスが、世界を制覇し、天に向けて勝利宣言をした瞬間に、彼らは絶滅の橋を渡ったのだった。
僕の前で、フラッシュを浴び、高らかに首を天に伸ばした首長の顔が、勝利の宣言をした瞬間のままに凍り付き、歓喜の表情を崩す間もなく息絶えた。
場面は、さらに一転する。
街に人が溢れ、さまざまな人種がいき交っている。白人も、黒人も、黄色人種も。国境がなくなり、戦争が絶えて久しい。しかし、いき交う人々の顔は憂いに満ちている。
新たなエネルギー源の発見と、新種の食糧を獲得したため、衣食住に事欠くことはないものの、頻発する地震や洪水で、人口の三分の一が死に絶えた。死に至らなくとも、重傷、軽症、感染症を合わせると、実に半数が被害に遭い、街は疲弊した病人で溢れている。
学校も、役所も臨時の救護所に当てられ、車という車は救急車代わりとなった。
世界のリーダー国家がなくなって一世紀を刻もうとしており、飽食を重ね、動き進むことを忘れた人々の平均寿命は三十四歳と、毎年低下する一方である。
暫定政府の若い大統領は、二十人の裸婦を傍に侍らせたまま記者会見に臨み、生殖行為こそ人類に課せられた第一義であり、この危機を脱する道は他にない、とのメッセージを全世界に発した。
「産めよ、増やせ」
「奥底に眠るわが種の魂を鼓舞せよ」
「身内に流れる、己の血を誇るのだ。賛美するのだ」
「必ずや、われわれ人類は勝利する。それは、われわれの内にある闘争本能に目覚めることによってだ」
「本能の火を燃やせ。怠惰な自らを叱咤せよ」
「事は急ぐのだ」
テレビ画面から、大統領の声が空しく流れ、落ちていく。
街頭の大画面の前に立ち止まる人もまばらで、オフィスに動く人影も少ない。出勤しようにも先日の洪水で家が流され、線路が流さ

れ、社員自らも濁流に呑まれた。
衣食や住居の手当は、過去の遺産でなんとか賄われているが、気持ちの奥底に巣くう虚脱が、食物を自分の口に運ぼうとさせない。
一人が消費する食物は、標準カロリーの半分程度だし、大きなエネルギーを要する出産に至っては、殆どの女性が耐えられない。育児となると、もはや個人の手に負えないので、国家のプロジェクトが、周囲を鉄条網で囲んだ施設の中で、特命を帯びて行っている。
かつて、平和の祭典と賛美され、速さと、強さと優美さを競っていたオリンピックなどは、はるかな遠い伝説でしかない。
「闘え、闘うのだ」
大統領は、ヒステリックに、同じフレーズを三度叫んだ。

僕は、薄れていきそうな気持を振り絞り、目の前のパソコンの画面にCを取り込むよう、指示を送った。Cを、Cを、キャンセルを
と叫び、マウスを懸命にクリックした。
そのまま倒れ込もうとする寸前に、パソコンは黒い画面に戻り、また唸り音をたてていたが、やがて初期画面に立ち返った。
僕は、その場に崩れた。

気を失っていたのか、眠っていたのかわからない。
ふらつく体をやっとのことで半分起こしたとき、日はとっぷり暮れていた。五時間以上も、畳に突っ伏していたことになる。
パソコンはと見ると、初期画面のまま机に乗っており、マウスは僕が倒れ込むとともに垂れ下がったとみえる。
Uの本は足元のあたりに飛び、ページの何枚かはその周囲に散らばっていた。
夢だったのかもしれない、と思った。
頭の芯に鈍い痛みがあった。重苦しい思いが胸を塞いでいた。
「過ぎ去った未来、いつでも出会える過去」
に出会ったのだったかどうか、僕のうちには判然としないものがある。
Uのプログラムは、バーチャルな体験をも目指している筈だったから、あるいは目標の一端に触れたのだったかもしれない。
しかし、多くの学者たちが口を揃えていうとおりに、ゲームの世界を彷徨っただけだったのだといえなくもない。しかし、例えゲームであったとしても、これまでの常識を覆す迫真のゲームではあるのだが。

明け方の戸外は、薄手のシャツでは寒いほどだった。
道路には、朝刊を配るバイクが走り、老いた夫婦連れや、野良犬

たちが歩いていた。
「これは、珍しい」
斜め後ろから声をかけられ振り向いたが、思い当たらない顔だった。眼鏡の奥で、細い目が笑っている。
「どうです、楽しめてますか」
よく見ると、古本屋の亭主である。いつもうず高く積んだ、黴の臭いのする本の間に埋もれている姿しか見たことがなかったのに、百八十センチを越える長身で、四十年輩にしか見えないトレーニングシャツ姿の亭主は、いたずらっぽく笑った。
「いや、わたしもね、結構バーチャルゲームは見てきましたが、Uのはスケールが違いますからね」
「Uの例のパソコン」
「あれはガラクタですよ。なにをどうしたものか、全く使いものになりません。わたしは、もう一台Uが実際使っていたゲーム機をもっていましてね。これは商売柄その筋から転がってきたものでして、こいつはすごい。関ヶ原の戦いと銘打ったやつなど、家康の心臓にコンマ三ミリの距離まで刃が迫るというものでして、さすがに超エリートの物理学者、Uの才能には喝采ですな。それが、なにを間違って精神病院に入れられたのやら」
亭主は、機嫌がよい。いつも、古本の奥であくびを噛み殺しそうな表情をしている亭主とは、別人だ。
「Uの本、あれは」
「Uの本には違いありません。でも、あれはUが変質してしまってからの作のようで、誰一人相手にした形跡はありません。無理もないですよ、将来を最も嘱望されたUが、ひょんな事件を契機に変わり始めたといいますから」
亭主は、「Uが変わり始めたのは、頭を休めるために、見本林を訪ね始めてからだといわれています。そこのベンチに腰を下ろし、仮眠をするのが楽しみだったといいます。ところが、自分の後ろの古木が急に若い芽を吹き、細かった樹が一気に三年の成長をとげるといったことが続き、だんだん軌道をそれていったといいます」と声をひそめる。
「なに、わたしが使っているゲーム機のソフトウェアは、Uが若い頃に考案したのを業者が製品化したものでして、しかし、ちょっと危険な思想が盛り込まれているということで、市場に出る寸前に販売禁止となったものです。でも、さすがに当局が目を光らせるだけのことはあり、迫力満点ですよ」
亭主はそれだけいうと、ジョギングの続きを再開し、路地の向こうに消えていった。
僕は、これ以上いくあてもないのに気付き、アパートへの道を引

き返した。携帯電話の店は閉まっており、コーナーの宝くじ売り場には、三億円出ました、との赤字の札が貼られているものの、いつもの年輩の女性の姿はない。

ポケットを鳴らし、鍵束を取り出す。いちいち鍵をかける必要などないのだが、長年の習性でやはり施錠してしまう。

おや、と思った。

ドアが数センチ開いたままになっており、隙間から僕のではない靴が見える。

瞬間身構えた。今の僕に、なにが起きようが、なにが起こるまいがなにも関係ない。そう思い直し、ドアに手をかけた。

祐子だった。祐子が玄関の土間に立っている。

「ごめんなさい」

祐子は、泣きはらした目を向けた。

「ドアが開いていたんです。それで、勝手に入り込んでしまいました」

僕は、いいんだよ、と祐子の肩をポンと叩いたのだったかどうか。

パソコン、畳に散らばったUの本、カップ麺の夥しい袋。脱ぎ捨てた下着。紐にぶら下げたシャツとズボン。塵籠を溢れた屑。敷き放しの布団。

僕が佇んでいると、祐子が後ろから背中に飛び付いてきた。全身を震わせ、涙に濡れた頬を擦り寄せているらしい。僕のシャツを掴む指先に、力が込められる。

「ごめんなさい」

そうやっていると、だんだん祐子の興奮も落ち着いてきたらしく、ストンと床に落ちた気がした。

振り返ると、祐子の手首に無数の切り傷があり、二筋の傷から血が滴っていた。

「なんだ、これは」

驚いて叫ぶと、祐子は閉じていた目をうっすらと開け、弱々しく首を横に振った。

「どうした」

祐子の肩を揺する。

「ごめんなさい。子供を手にかけ」

祐子は、僕の腕の中で首をガクリと仰向けに垂らした。

「なんだというんだ」

僕は、祐子の手が握りしめている携帯電話を引き抜いた。急いで、一一九番をプッシュする。

「しっかりしろ、大丈夫だ」

僕は、着ていた自分のシャツを脱ぐと、祐子の腕にきつく巻き付

けた。しかし、祐子の顔はみるみる蒼白に変わっていく。
祐子の頬を殴った。しっかりしろ、と叫びながら殴った。
救急車のサイレンが近付き、止まった。
僕は、いったん祐子から離れ、ベランダに走り出た。救急隊員の一人に合図をし、部屋に戻った。
しかし、祐子の姿がない。透き通りそうな顔色で横たわっていた、祐子がいない。
机上のパソコンが、グワッという音をたて、起動を始めたらしい。見ると、パソコンの置かれた机傍のガラス戸が開けられ、ガラス戸の向こうに人影がある。
「なんでそんなところに出る」
ガラス戸の向こうには、畳一枚ほどのスペースがあり、物干場になっている。五階のテラスなのだ。
「じっとしてろ、動くんじゃない」
ゆっくりと、祐子が振り返った。白い顔だった。鼻筋から顎にかけての鮮やかな線が、美しかった。
祐子は、唇だけを動かした。
次の瞬間、祐子の体は腰丈ほどの柵を巻いて後ろに倒れ、スローモーションとなって宙に躍り出た。
突然、パソコンの画面が部屋全体を取り込むかの如く、巨大な動物の口に似た深紅の画面を映し出した。

（了）